

---

# 神様と居候

守水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様と居候

### 【Nコード】

N6311P

### 【作者名】

守水

### 【あらすじ】

街中でふと声をかけた男は、自身を神様と名乗り、吸血鬼だと言った。自称神様と暮らすお話。

## 第一話

寒気。吐き気。めまい。汗。体の奥からわいてくる、もどかしさのようなむずがゆさのような感覚。いいとは言えない症状が一度に味わえるなんて、一生にあるかないかのことだろう。

「……はあっ」

やっとの思いで、たくさん息を吐く事ができた。運動したわけでもなく、恐ろしいモノを見たわけでも、緊張するようなことをしたわけでもない。電灯もないこの殺風景な部屋の中、そんなことが起きるはずがない。それでも、俺の心臓はその時のように忙しく働いている。体が少し楽になったかと思うと、すぐに飢えた獣のようなテンポの速い呼吸が始まる。

顔を上げた先にあるテーブルの上には、何も無い。いや、今まではたくさんあった。いつの間にか、右手は薄汚れたシャツの胸元を握り締めていた。

「……がんばれ……耐えるんだ……」

自分にしか聞こえないほどの声量で、自身に言い聞かせる。壁に寄りかかっていたはずなのに、いつの間にか膝立ちになっていた。加えて前のめりの上半身。今にも倒れそうな病人に見えることだろう。

そうだ。この苦しみが、あの感覚の代償だ。これ乗り越えれば、俺はまたもとの生活に戻る。そうしたらもう、あんな世界には二度と足を踏み込まない……

「なるほど……。あなたは自分で克服しようとなさってるんですね。よいことです」

誰もいないはずの部屋に、声が響いた。テーブルの向こうに、人が立っている。

「努力している人には、よけいな手出しはしませんから。がんばってくださいね」

マントでも着てるんだろうか。そいつが身を翻したとき、ばさりと服がはためいたのが見えた。そしてその隙間から覗いた、白い粉の入った袋……

「あ……」

「……見えました？」

出たかどうか自分でもわからない声を、あいつは聞き取ったらしい。懐に手を突っ込むと、そいつは俺が見たそれを見せつけた。

「これがほしい……なんて言ったらだめですよ、あなた。せっかく努力してるんですから」

「う……あ……」

床にもテーブルにも、武器になりそうなものはどこにもない。だから俺は……

「あああああっ！」

素手でそいつに向かっていった。

「やっぱりだめでしたか……」

そいつが見せつけた袋を、俺は掴み取るうとした。だが相手は無駄のない動きで軽々とよける。斜め後ろに回ったそいつを振り返ったときには、袋は隠してしまったようだった。

「仕方ありませんね。こういう状態になったのなら、やるしかありませんか」

こいつの独り言になど、俺は関心をはらわなかった。俺の目的は、今までやつが持っていた

「！」

何か素早く俺の顔に伸びてきたのが見えた。しかし衝撃が襲った後、それは俺の顔じゃなく、首を狙っていたものだとなった。首の痛みとほぼ同時に、後頭部にも衝撃が走る。

「すみませんね、乱暴な真似して。でもこうしないと、あなたの体が壊れてしまいます」

壁に叩きつけられた痛みで、はっきりしてなかった視界が、ますますぼやけた。それでも、俺は俺の首を壁に押し付けているやつと、

同じ目線だと理解できた。その相手の顔が、心なしか先ほどより大きく見えるような……

「大丈夫です。痛みはありませんから……もつとも、私はこんなことされたことないので、本当のことはなんとも言えませんがね。どうせ私は一生、する側ですから……」

感覚が鈍っていたんだろうか。

その声は、顔のすぐ下　いつの間にか手の離れた、首筋から聞こえた。

「……！」

何か鋭いものが二つ、自分の体内に入り込んだのを感じた。小さな痛みと痺れが全身を駆けたかと思うと、自分の意識が消えてゆくのを感じた。

「ん……」

薄汚れた灰色の天井に、影ができています。俺、床に寝てたのか？

「ふあ……。なんか久しぶりによく寝たなあ」

大きく背伸びをして、すぐ後ろにあったコンクリートの壁に背をあずける。本当に、こんなに頭がスッキリしてる朝は珍しい。左手首のデジタル時計を見ると、今はもう九時四十五分過ぎだということがあった。

「そろそろ店開く頃かな……。財布財布つと」

空き缶やらくずゴミやらが散乱する床を歩き、俺は隅にあった小さな引き出しを開けた。中には財布以外ほとんど何も入ってない。百円ショップで買った財布を手にとると、俺は外へと出た。

「うわあ、久しぶりだな」

俺の家は家と呼べるようなものじゃない。とあるビルの一階部分、空き家になったところに住み着いている、いわばホームレスみたいな生活を送っているのだ。路地を曲がらないとそのビルには行けないから、滅多に人は通らない。そんな場所を歩いて、本通りに出た。

車と人が通る、懐かしい場所だ。

「さてと、どこに行こうかな……」

足を止めて財布の中身を確認。……新渡戸さんや樋口さんどころか、野口さんや夏目さんもいやしねえ。いるのは数字が書かれた硬貨一枚。

「まあ百円じゃないだけましか……」

いたのは、五百円玉。コーヒー一杯ぐらいは飲めるだろう。

人の流れに乗って、わき道を曲がる。その道は、歩行者だけの道になっていた。ふと前を見ると、一人の男が歩いている。ただ前を歩いていただけなのに、なぜかその男に既視感を感じた。

「あの……すみません」

ほぼ衝動的だった。わき目もふらず、俺はその男に話しかけていた。

「はい？」

かなり素直なやつだ。少し驚いたような顔ですぐはこちらを向いた。だがその顔を見た途端、伏されていた記憶が立ち上がったのを感じた。それも次々に。

「……っ、あんた！」

男の顔に見覚えはなかった。だが、その男から発せられている雰囲気というものが、なぜか消えかけていた昨夜の思い出を、生き返らせたのだ。

「はい、なんででしょう？」

分けられた黒の前髪が、かすかに風に揺れた。男の笑顔は、優しくて柔らかいと表現するのが一番好ましいだろう。だが、俺はそんな笑顔などに気をはらっている場合ではなかった。

「あ、あんただろ！ 昨日の夜、俺の家に来てなんかしてっただの！」

なにやら英文が書かれている半袖シャツに、風を通しやすそうな長いズボン。細い金属製のブレスレットを重ねてつけていたり、見た目は今どきの若者の格好だ。だが、この男を見たとき、あの記憶が呼び起こされた。こいつが昨日、俺の家に来たやつだと、確信

していた。

「あなたの家？ 失礼ですけど、あなたとは初対面のはずじゃ……」

「いやー、あんただ！ その声、聞き覚えがある」

こんな今どきな格好してる割には、言葉遣いが変わってる。こいつの声は、確かにどこかに引つかかっていた。

「昨日、俺の家に来て、何してっただ！ 何も取るもんはなかったはずだぞ。家の主にまで暴力振るいやがって」

「あらら、そこまで覚えてたんですか……。困ったな。……。……。わかりました。昨夜、あなたの家に行ったのは私です。認めますよ。詳しい話はどこかに落ち着いてからにしましょう。ああ、その喫茶店はどうです？」

男が指したのは、俺が行こうとしてた喫茶店だった。前から何度か行ったことがある。

「いいよ。ただ、ちゃんと話してくれよ」

「わかってますよ」

くるりと喫茶店を向いて歩き出した男の後を、俺はついていった。

## 第二話

「……なんでそんな重大なこと忘れてたんだ？ 俺」

「そんな台詞聞くの、僕初めてですよ」

コーヒーカップから口を離し、呆然と呟いた俺を見た男は、頬杖をついたまま窓の外を見ながら、ため息混じりで言った。

「僕と関わったことと、クスリのことをきれいさっぱり、相手から消してきたってのに……。どうして思い出しちゃうんでしょう」

「そうだよ……俺、ずっとあそこで……」

若い今どき男を装ったやつは無視して、俺は記憶を引きずり出していった。

どうして忘れていたんだろう。俺はずっとあそこで、ヤク漬けの日々を送っていたことを。あの快楽を、そしてやめようと決意した日々の苦しみを。

「あなたが使っていたものは、新種か何かだったんでしょかねえ。見事に症状が混ざってましたから。あの様子だと、あときの退薬症状は吐き気とか、ふるえとかじゃありませんでした？ そうするとあへんとかヘロインになるんですがね。でも、陶酔感とかしびれとかありませんでした？ それだとシンナーとかになるんだけど」

……なんでこんなに詳しいんだ？ こいつ。

「あのさ……何かの専門家？」

「いいえ。専門家ではありません」

「ずいぶんと“では”が強調されてたような。笑顔で答えたりには。」

「それで、どうだったんです？ あなたの使っていたものは、新種なのかどうかはわかりますが、土戸広直さん？」

「……なんでフルネームなんだよ。しかも名字つき」

一応つつこんだが、質問には答えることにした。息を一つ吐く。

「俺にはわからねえ。大体もらうだけの立場の俺に、クスリの種類



まで教えるかよ」

「それはそうですね。もしかしたらつてことを考えて聞いてみたんですが、やっぱり知りませんでしたか」

そいつはストローに指を添えて、中身を飲んだ。ちなみにその中身は……オレンジジュース。子供か女みたいだ。

肩に触れている黒髪は、ほんの少し茶色には見えるが、俺よりはました。俺は染めて茶髪だから。

「ふう……。それじゃあ」

「？」

ぶつりと途中で言葉を切り、立ち上がった男を俺は見上げた。その時には、そいつの指先が、俺の額に当てられている。

状況を理解できていないまま、俺は動けないでいた。長く感じていたが、多分一分も経っていなかったと思う。気づいたときには、そいつは困ったような顔で、どさりと席に戻っていた。

「なんとまた……。これは本当に困った」

こいつ、感情がすぐ顔に出るんだろうか。

「何が困ったんだよ」

「今ね、あなたの記憶の中から、僕とクスリに関する事柄を消そうとしたんだ。だけど、僕はどうやら君にとつて強烈な登場の仕方でもしたようだね。クスリについてのことはまだしも、僕に関しての記憶が、完全に彫り込まれている。これじゃあ、君のほかの記憶情報まで傷つけてしまう」

「よくわかんねえけど……」

「君は、他の大事な記憶を道連れにしなきゃ、僕のことを忘れられないってこと……。クスリの記憶だけ消しても、僕のことを思い出すことによって、クスリのこととも連想で思い出してしまうかもしれない。そしたら消した意味がなくなるでしょ？ はあ、こんなことは初めてだ。さて、どうしたものか……」

とにかく、俺にわかったことは、こいつは今まで、俺みたいになやつにたくさん出会ってきたってことと、例外なく、そいつらのクス

りこの男に関する記憶を、消し去ってきたってことだ。だけどその例外が、今起こっている。

「どうしようかなあ……」

ぶつぶつ言いながら、そいつはいつの間にか勘定を持って、レジに向かっている。

「へ？ あ、おい！ 俺まだコーヒー代出して……」

出していない、と言ったときには遅かった。さして高い金額でもなかったが、俺は見ず知らずの男に、コーヒー一杯分の金を払ってもらっていた。

「ちよつ、と、待て！」

慌てて捕まえたときには、すでに店の外に出ていた。

「お前、俺の分まで払っただろ！」

「ええ、払いましたけど？ だってあまりお金持っていないでしょう？」

それはそうだけど。

「俺はな、たとえ所持金がゼロにほど近くても、自分の分は自分で払う主義通してんだよ！ だから払わせろ！ 今のコーヒー代」

「……………」

ヤク漬けになっても、良心だけは忘れてない。無理やり五百円玉を握らせようとしたが

「ちよつと待った。僕いいことを思いつきましたよ」

「は？」

見上げると、そこにはいたはずらっぽく笑う顔があった。……こいつ俺より背高かったんだ。少しだけど。

「そのコーヒー代ですよ。僕のことを知っている人が普通にその辺で歩いちゃ、僕少し困ります。あなたが絶対に離さないと誓っても、きつとなにかのはずみで話してしまうでしょう。ああ、あなたのことを信用してないわけじゃありませんよ。だからあなたには、僕の家に住んでもらいます。正確には部屋かな？」

「…………？ ま、待て。なんで俺がお前んとこに住まなきゃ

」

「理由はありますよ。僕、お金を払ってもらうんですたら、百五十円なら百五十円、三百十五円なら三百十五円と、きっちり払ってもらわないと気がすまないんですよ。さっきのコーヒー、二百五十円でしたね。そのお金の分、僕の家でバイトってのはどうです？ それにあなたの家、家なんて呼べるものじゃないでしょう？ もうちよつとまともなところに住んでみたいって、思ったことありません？」

おいにある。だけど二百五十円分のバイトなんて、すぐ終わるぞ。

「いや、だめだ。そんなバイト、一日で終わっちゃうじゃないか」

「僕ね、金銭感覚がおかしいようですよ」

とびっきりの嘘を考えついたときのような顔で、そいつは身をかがめた。

「どんなにがんばってももらっても、せいぜい一、二円ぐらいの働気分だとは思えないんですよ。そしたらたくさんいられるでしょ？」

「……お前さ、俺をお前ちにそんなにおきたいわけ？」

「まさか。ただ、その間は身の安全は完全保障いたしますってことを言ってるんです」

雨風を完全にしのげるんだから、願ってもないチャンスなことばチャンスだが、やはりどこか怪しい。このご時世だ、ここまで優しいやつは逆に危険に見られる。現に、俺は危険と見てる。

「ああ、僕のことならお構いなく。僕、こんなうるさそつな若者のカツコはしてるけど、ホントは全然違うんですよ」

「はあ？」

次に発せられたそいつの言葉を聞いたとき、右手に俺の五百円玉があったことを、俺はしばらく忘れなかった。

「僕の名前は広海慶喜。でもこれは仮の名前。ついでに言うと、僕は神様で、吸血鬼なんです」

### 第三話

「……これって高級マンションってやつだよな」

「そうですか？」

「誰見たってそうだが！」

高さだけでなく、幅も並みのマンションとは比べ物にならない。それに右側に並ぶドアの間隔が大きいから、部屋も広いんだろう。廊下も広いし。そんなでかいマンションに住んでる隣の男は、ここにこと笑みを絶やさなймаまだ。逆に怪しい。

「さあ、着きましたよ。ここが私の部屋です」

そいつが止まったドアは、はじっこにほど近い場所にあった。部屋の番号は五〇三。

「ちよつと待つててくださいね。今鍵を……」

「ごそごそポケットをあさり始めたとき、ちよつと右隣のドアが開いた。そこから顔を覗かせたのは、一人の女だ。そいつの顔を見て、俺は素つ頓狂な声をあげることになった。

「え？ あ、お前実砂！？」

「え……？ あれえ、もしかしてヒロ？ どーしたのこんなとこで」

「おや、お友達で？」

突然始まった会話に、鍵を探していた男は静かに驚きの感情を示した。

「前……クスリやってたやつらと住んでた頃、一緒にいたやつの人だ。少し親しくなつてな……。それにしても実砂、お前こんなとこに住んでたのか」

声を弱めて、俺は男に説明した。相手も、小さく相槌を返してきた。彼女には明るく振舞う。

「うん。お金は出してもらってるの」

「今もやってんのか……？ あれ」

「クスリい？ うん、あたりまえじゃん」

俺のため息は、ドアの開いた音に相殺された。

「なあに？ ヒロ、ケイ君のところに泊まるの？」

「ん？ ああ」

部屋に入った主に続いて入ろうとすると、自分はドアの外に出ながら実砂が聞いてきた。

「とうより、同棲といますか？」

ひよっこ顔だけ外に出して、部屋の主がよけいなことを口走った。やっぱり笑顔。

「へー、そうなんだあ。ふふ、結婚おめでとー」

「待て！ なんでそうなる！」

「お祝いありがとうございます、本鹿さん」

「お前ものるな！」

俺のつつこみに含み笑いしながら、じゃあねと一言残し、実砂は廊下を歩いていった。多分、買い物か何かに行くんだろう。

「さ、どうぞ入ってください」

実砂がエレベーターに乗るまで見送っていた俺を、プレスレットをじゃらじゃらつけた男が促した。

「あ、ああ……。おじゃましまーすと」

少し重たそうなドアを閉め、広い玄関にしばし唾然。とりあえず靴を脱いで上がり、廊下と直結したリビング兼ダイニングルームの広さに、かなり唾然。目の前に横たわるベッドは大きくはあるが、質素な雰囲気だ。その左手には、二人用の木製テーブル。といったもでかい。

「やっぱり広っ……」

「そうですか？ まあ、まずその服どうにかしないとイケませんね。私のでよければ、服はお貸ししますけど」

「へ？ いいのか？ 俺なんかに」

「何をおっしゃいます。人類皆平等ですよ？ さ、シャワーでも浴びてきてください。その間に服持ってきておきます。あと、軽く何か食べましょう。さっきコーヒーだけでしたからね」

「またどっかに行くのか？」

風呂に案内されながら、俺は問いかけた。別に外に出るのがいやだったわけじゃないが。

「いいえ、私を作ります」

「……飯を？」

「ええ。……ご不満ですか？」

顔をしかめた俺を見て、少し悲しそうに返事を返してきた。

「いや、作れんのかなーと思って……」

「一人暮らしですからね、これでも。ご飯には自信がありますから、安心してください」

脱衣所に入ろうとしていた俺の肩をぽんと軽く押し、そいつは言った。

「ん、じゃあ安心しとくわ……」

頭上のミニシャンデリアのような電灯がついたのを見ながら、俺は答えた。

「そうだ、あなたのことはなんと呼べばいいですか？ 本鹿さんみたいには口？」

「なんで会って半日も経ってないヤツに、そんな馴れ馴れしく呼ばれなきゃいけないんだよ……」

いつまでも明るい口調の相手に、がっくりと肩を落としながら、俺は呟いた。

「ですよねえ。じゃあ広直さんでいいですか？」

「あーはいはい、いいですよ」

なんでこんな会話しなくちゃいけないんだ。

「私のことは慶喜でいいですよ」

「あれ、お前それ仮の名前とか言ってたか？」

「ええ。まああつちが本名といえは本名ですが……。あ、もしかして、教えたらそっちで呼んでくれたりします？ そしたらしくくるから、嬉しいんですけど」

「……………」

終始笑顔のこいつには、付き合ってられない。

「……………うま」

「え？ 変な味しました？」

ぼつりと小さくこぼれた感想に、慶喜は過剰に反応した。身を乗り出してまで、困ったように問いかける。

「私あんまり自分の料理食べさせたことなくて……………。おいしくなかったら残してくれてもかまいませんよ？」

「い、いやそうじゃなくて。俺はうまいっていったの。そんなにまじかつたら二枚も食うかって」

そう言う俺の右手に握られたフォークには、二枚目のジャガイモスライス。味付けは塩コショウとかバターとかでシンプルなんだけど、なかなか箸が……………いや、フォークが進む。

「お前さあ、店でも開いたらどーよ。この椎茸とタケノコの炊き込みご飯もうまいし」

「あ、すみません……………それ、昨日の残り物なんです。あまつちやつたんで、ラップに包んで冷蔵庫に……………」

そいつをあとためて出した、というわけか。再び飯に箸をつけながら、俺は思った。心底困ったように膝に手を置き（ここからは見えないのでおそらく）、頭もがっくり下げている。俺はそんな慶喜をなぐさめるために、というわけではなかったが、素直な感想を述べることにした。

「これで残り物なのか？ それじゃあ炊きたてはさぞうまかつたらうなあ。味付けもちょうどいいし」

「……………ホントですか？ あまり物出されて怒ったりしてませんか？」  
「まさか。お前がほぼ無理やり連れてきたとはいえ、食べる物出してくれりゃ十分だよ。それに冗談抜きでうまいし」

俺の言葉に、慶喜はやっぱり心底ほつとしたようだ。目に見えて固くなっていた肩から、力が抜けていく。

「あ、あとこのきんぴらごぼつもな。あとレタス……はドレッシングかけただけか。でもホントうまいわ」

「あー、ありがとうございます……。もう口に合わなかったらどうしようどうしよう……」

「とりあえずお前も自分の食べよ」

「あ、そうでした」

俺の感想ばかり気にしていたようで、自分の分はさっぱり口にしていな。俺に指摘されて、冷めかけた食事を、慶喜はやっと食べ始めた。

「でもよかったですよー。自信あるとか言いましたけど、やっぱり心配でしたから」

「それでさ。ちょっと話を戻すけど、お前のさっき……でもないけど自己紹介のことなんだけど」

「神様と吸血鬼のことですか？」

「そうそれ」

ジャガイモスライスが口からはみ出た状態で返事したので、もごもごと少しくぐもってはいたが、やっぱりさっき聞いた言葉に変わりはなかった。さっきでもないけど。ごくりとスライスを飲み込んでから、慶喜は話し始めた。

「嘘ではありませんよ。私は神様なんです。全然そういつふつに見えないのは、この人間社会に紛れるためであってですね……。あ、その目は信じてないでしょう」

「とーぜんだ」

ちらりと目の端でにらんだ慶喜に、俺はそっけなく返した。

「大体、神様であり吸血鬼だっつーのが変なんだよ。どっちも架空じゃねえか」

「失礼な。きゅーけつきはともかく、神様はホントにいますよ。現に、あなたの前に座ってる若者がそうですから」

……やっぱり付き合ってられない。椅子に背を預けながら、俺はため息をついた。



「まあとにかく、信じる信じないは後回しにして、とりあえず話だけは聞いてくれませんか？」

「じゃあ、話だけな」

おとぎ話ぐらいには付き合ってやるか。

「まず、私は以前のあなたのように、麻薬というやつで精神がぼろぼろになってしまった人間たちを、正常に戻すということをやっています」

「神様らしいな」

「まあ、このシステムは二年前ほどにつくられた、わりと最近のものなんですけどね」

神様の世界にもシステムなんてあるのか。

「で、そのヤク漬けになったやつらの救出活動ときゅーけつきとやらと、どう関係があるんだ？」

「それがですね、まったくこの事に関しては何度あの方に上申しようと思ったことが……」

早口でまくしたてたほどだから、随分といやだったようだ。とりあえず“あの方”とやらは無視して、“この事”について聞くことにした。

「何やつかいごともちかけられたんだ？」

「聞いて驚かないでください。私はとある救出方法を与えられました。しかしその方法というのが……」

「方法というのが？」

つい繰り返してしまった。あんまり真剣な声なので。ついでに目も。

「伝承に残る吸血鬼みたいに、首にがぶりと噛み付いちゃって、そこから血液と一緒にその人の悪いものを吸い取ると、こういことなんです」

「……………それ本当か？」

「本当ですとも」

しばし沈黙ののち。

「……ぶっ、ははっ、なんだそれえ！」

「あ！ ちよっ、笑いましたね！？」

「こっ、これが笑わずにいられるかっての！ んな神様いてたまるかよ！」

「仕方ないじゃないですか、私が好んで選んだ方法なんかじゃないんですから……。まあ、万が一人に見られても、吸血鬼のカッコした変な人がいたですみますからね……。手から光が出て、それが相手を包んだと思ったら、その人が元気になった！ なーんて言われて追っかけられるよりましですよ」

とりあえず話の続きは聞いてたが、笑いが止まらない。

「いーかげん笑うの止めてくれませんかー？ 私は真面目にやってるんですから。なんだか恥ずかしくなってきましたよ……」

頭をかかえた慶喜の顔が、少し赤くなっている。でもその視覚情報も危ういものだ。笑いすぎて、今や俺は涙目だから。

「だってさ、それは俺にもやったってことだろ？」

「ええ、まあ」

「俺もちゃんとは覚えてないけど、もしそうだとしたら、俺の首に傷とか残ってるだろ」

「いいえ、残ってませんよ。そういうのは消す力があるんです、私たち」

あっけらかんと、慶喜は答えた。

「いやホント、信じられないよそれ」

「いいですよ、信じてくださらなくても」

ガキみたいにふてくされながら、慶喜は食器をかたづけ始めた。俺もそれに倣って、カウンターに食器を置いた。

「ああ、そうだ。お前あいつが……実砂がヤクやってるって、お前知ってるのか？」

「“お前”って二回言いましたよ、あなた」

「いいだろそんなの。とにかく、知ってるのか？」

台詞だけ見たら、夫に対して言う妻みたいだなあとかどうでもい

いことを考えながら、俺は再度繰り返した。

「ええ。時々うめき声とか叫び声とか聞こえてましたから。それだけでなく、目を見ればわかりますよ。隣にいるのに未だに助けあげられないんです。なかなかタイミングがつかめなくて」

かすかにうつむいた顔には、悔しさからくる悲しみの色が広がっていた。

「まったく、神様だつてのにだめだめですね、私は」

さあ、皿洗い皿洗いと意気込んでいる慶喜は、ついさっきまでとは別人のように元気になっていた。

「吸血鬼のような神様、ねえ……」

戻りつつあった昨夜の記憶　一番もやがかかっている部分が、俺はなぜかひっかかっていた。

## 第四話

「もしもし」

声と共に、ドアがノックされた。ドアと直線状に位置するベッドの上に寝転んでいた俺は、半身を起こして返事する。

「はいよー。その声は実砂か？」

「えへへ、あたりー。入っていい？」

「ああ、いいぞ」

少し遠慮がちに顔をのぞかせ、俺の顔を確認した途端一気に入ってきたのは、隣人の実砂だ。

「ケイ君は？」

「ああ、あいつなら食料買い出しに行つたぜ」

「そうなんだ」

実砂の返答が、いささか平坦に聞こえた。

「ねえヒ口、その顔だと、あんたクスリやめたの？」

「ん？ ああ……っーよりやめさせられたのかな」

おそらく、買い物に行つてるあいつに。

「もったいない……。ねえ、またやんない？」

「……は？」

俺はつい呆けた声を出していた。そういう実砂の顔は、見た事がある。あのときの俺みたいに禁断症状とまではいかないが、身体はかなりクスリを欲しがつてるときの顔だ。

「ば、馬鹿言え。やめるときひどいことになるって言うたろ？ 俺

やだもんそんなの」

「じゃあやめなきゃいいんだよ。ずーっとやってれば。だいじょーぶ、クスリは使う量が増えたって言えば、たくさんくれるから」

「ばっ、馬鹿ちよつと待て……でっ！」

慌てて腰を浮かそうとした俺を、実砂はベッドに押し返した。しかも、俺の胸の上にしっかり腰を下ろして。俺は椅子じゃないぞ。

「おいっ……！ 何すんだ実砂！」

「怒らないでよー。あたしはヒロにこれあげようと思って来たんだから」

ひらりと俺の顔の上に現れたそれは、見慣れた粉薬。その中身は改良されたヤクで、効用は快樂と苦痛のアリ地獄だ。ずっと奥で待ち構えるのは、爪をはがされた後四肢を切断されて、臓物全てと目玉を、焼けたナイフで抉り出される痛みと同等だが別格の、“自分に直接攻撃してくる怪物だ。身体の痛みは少しずつだがおさまる。だがこの怪物は、少しの治癒も許してはくれない心の傷と、真の暗闇に一人放り出される最高の孤独感、人間として生きていけなくなるような雰囲気、外観を授けてくれる。

そうだ。俺はそのきれっぱしを味わったんだ。つい、三、四日前に。

「ほーら、今開けたげるからね」

「……っ！ やめる実砂！」

だめだ。実砂のやつ顔がヤバイ。顔のすぐ上で思いつきり開けられたら、嫌でも吸っちゃう。あの寒気が、吐き気が、めまいが、汗が、体の奥からわいてくる、もどかしさのようなむずがゆさのような感覚が。あいつらがすぐそこで待っている。こんな恐怖、味わったことない。

目の前の女が、この上なく恐ろしい人間に見えてきた。それでも突き飛ばす勇気が出てこなかったのは、心のどこかで、数少ない友としての認識があつたからだろうか。

「あつれー？ 開かないなあ……」

切り口からなかなか袋が開かないらしい。でもいつかは開く。どうする……

「ただいま帰りましたー、広直さん。今日の夕食はすき焼きにでもしますか」

なんで夏にすき焼きなんだ、と一瞬つつこんだが、すぐに我に返った。慶喜のやつが帰ってきた。しかも顔をあげればすぐにこのべ

ツドが見える。

「あれ、誰か来てるんですか？ あんまり大人数は連れ込まないでくださいね……………つてあら」

廊下を半分以上歩いたところで、やつとこちらを向いた。半袖長ジーンズでブレスレットをつけてる男がレジ袋を提げてるのは異様な感じだが、それでも今の俺にとっては救世主だ。いつのまにか実砂も慶喜を見ている。

「あらあ、お帰りケイ君。お邪魔してたよ」

「ええ、それはかまいませんが……………。全く広直さん」

「あ？」

そんな怪訝な顔する前に助けてくれ。

「あなたねえ、仮にも人の家でやっていいことと悪いことってのがあるでしょ？ しかもまだ三時ですよ？」

……………勘違いしてる。こいつは何か勘違いしているぞ！

「ちよつと待てコラ！ この状況見て言うのはその台詞か！？」

「それ以外何かありますか？ ん……………。あの、とりあえず私トイレか風呂にでもこもってましようか？」

「……………つめ……………！」

頭も顔も熱くなって、思わず半泣きしそうになった。神様だったら俺を助ける！

「ケイ君、あなたもこれほしい？」

状況を理解してない実砂が、開けるのに一苦労していた袋を慶喜に見せた。ふと、やつの目がかすかに細くなった。

「やつぱりですか……………。広直さん」

買い物袋を足元に置いて、慶喜は小さく実砂を指した。やつの言いたい事が、なんとなく伝わった気がした。

「すまねえ実砂！」

「えつ……………きゃ！」

腐っても男だ。不利な体勢でも、これぐらいはできる。俺はしっかり座り込んでいた実砂を、床の上に落とした。ベッドはさほど高

くはないから、尻が少し痛くなるぐらいだろう。

「広直さん、私の家で何かやるときは、事前にお知らせしてくださいよ。私帰る時間調整しますから」

「てめーなあ！ いい加減やめろそれは！」

「わかってませんねえ、あなたは。最初から冗談でしたよ」  
「なんだか嫌なやつ。」

「さてと、実砂さん。彼は完全にクスリからは足を洗ったんです。他の人を巻き込むのはやめましょうよ」

まだ座り込んでいる実砂と視線を合わせるように、慶喜は膝をついた。

「や、だ………………。だって周りにあたしと同じ人がいないから、寂しい…………。」

実砂はうつむいた顔を赤くし、零れ落ちる涙を必死に手の甲でぬぐいながら、慶喜の問いに答えた。

「だったら、あなたが変わればいいんです。あなたが周りの人と同じになればいい。簡単でしょう？ 他の人を自分と同じにするよりは」

「うっん…………。」

実砂は大きく首を横に振った。

「だって、そうするときはずっと苦しい思いをしなきゃならないんですよ？ やだもんそんなの」

「そうですね。でもこのままクスリを続ければ、いずれあなたの身体はぼろぼろになってしまふ。そうしたら、ヒロや私にも会えませんよ？」

あだ名を言われてすこしムカツときたが、それは実砂を少しでも安心させるためのものだとな得させた。

「やめたいよ、あたしも…………。でも、怖い…………。」

「わかります、その気持ち。でも彼は…………。ヒロは、自分でやめようと思いましたよ？」

「ヒロは勇気があるから…………。あたしにはそんなのない。すぐ手を

出しちゃいそうで……」

その時、なぜか慶喜は笑った。嘲笑ではなく、苦勞して問題を解いた生徒の一部始終を見ていた、優しい先生のような。ゆっくりと実砂の頭をなでると、その手を肩に置く。

「じゃあ、あなたをクスリから助けてあげます。大丈夫、痛みはほとんどありませんから」

……どこかで聞いたような台詞だ。

「広直さん、私これから彼女を助けますが、あなたここにいますか？」

つつ立っていた俺を見上げて、慶喜が口を開いた。

「へ？ いちゃだめなのか？」

「そうじゃないですが……。ほら、前言ったでしょ？ 吸血鬼みただって」

「……ホントなのか？」

「ええ」

泣き疲れたのか、ややぐったりしている実砂の背を、慶喜は抱えた。

「人に見せるものでもないですし、見たいと思うようなものでもありませんからね。すぐ終わるんで、どこか見えないところにでも」

「……ああ」

ゆっくりと、だが少しずつ歩調を速めて、俺はキッチンに身を隠した。もし本当なら見て気分がよくなるものではない。だってあれだろ？ 詳しいわけじゃないが、吸血鬼って。確か十字架とかにくが苦手で……。

……やっぱり興味がわく。そっとかげから覗いてみた。

「………！」

ちょうどその時、慶喜の顔が実砂の首筋に埋まった。向こう側なので、慶喜の顔は見えない。実砂の首は後ろに倒れ、眠っているようにも見える。

ただ、それを見ると同時に、あの夜の一番もやがかった記憶が、



突然鮮明になった。壁に押さえつけられたときのかすかな首の痛み。首元から聞こえた声。そのあと全身を襲った、小さな痛みと痺れ。いや、その前に鋭い二つの何か、俺の首に……………

あれ？　もしかして鋭い二つの何かって……………まさか……………

埋まっていた慶喜の顔が、ふと上がった。閉じかけた唇の間から、赤く濡れた“鋭い二つの何か”の片割れが、なぜかはっきり見えた。

## 第五話

「……………」  
誰かの声が聞こえる。どこにやどこにやしてて、何を言ってるかはわからない。

「……………」  
わずかに鮮明になった。誰だろう。

「広直さんってば!」

「ぬあ!?!」

突然顔の上で叫ばれて、俺は跳ね起きた。自分でもこんなに腹筋が強かったのかと、感心してしまうくらい。そして同時に頭に激痛。詳しく言えば、脳の前頭葉にあたる部分に。

「つてて…………。あれ、慶喜?」

額を押さえて床にうずくまる部屋の主を発見し、俺はそいつに声をかけた。

「いったあ…………。あなたすごい石頭ですね。私頭蓋骨にひびが入るか……………」

そう言う慶喜の目は涙目だ。よっぽど痛かったらしい。俺ってそんなに石頭なのか?

「あれ、そついやここ…………はベッドか…………あ、実砂は!?!」

「お隣に」

「お隣につて…………わあ!」

左側は慶喜のいる床だ。お隣とは自然に右側になる。と、そこにはちょうどこっちに寝返りをうつた実砂がいた。誰もいないと思っていたところに人がいて、なおかつその人が体重を支える俺の右手に触れたので、また大声を出してしまった。

「どうです? 私のベッド結構広いでしょう」

「いや、そんなのどうでもいいから…………。あ、ところでこいつ、クスリは……………」

「抜けましたよ。すっかりね。でもあなた、見てたでしょ？ 声かけてもさっぱり出て来ないからもしかして……」と思つたら、台所で倒れてるじゃありませんか。私非力なんですからね。運ぶの大変でしたよ」

慶喜はため息をつきながら、おおげさに肩をすくめて見せた。

「ああ、好奇心がわいて、見てた……。そしたら突然、あんときの記憶が戻ってさ」

「じゃ、完全に覚えてるわけですね。私が初めてあなたに会った夜のこと」

「忘れてたくても忘れらんねえよ」

傷跡はないにしろ、蚊以外の生物に血を吸われたなんて、いやな記憶だ。いやすぎてすっかり刻まれてしまった。

「それじゃ、私実砂さんの部屋に行つて来ます。多分クスリたくさなかくしてると思ふんで。全部回収してきますよ」

「全部？ わかんのかよ」

背伸びをしながら隣人宅侵入を宣言した慶喜を見て、俺はとっさに考えついたことを言った。意外なところにクスリが隠してあったらどうするんだ？

「忘れてませんか？ 広直さん。私神様ですよ？ それぐらいわかりますって」

慶喜はまたにっこり笑つた。ずいぶんと優しい笑顔の神様だな。

「んじゃ、いつてらっしやい」

「はいはい。実砂さんにちよっかい出しちゃいけませんよ」

「さつさと行つて来い」

「もー、あなたがいる部屋、私が借りてるってこと忘れてませんか？」

……あんなちゃらちゃらしたやつが神様だなんて、やっぱり信じるのは無理だ。自称神様の若者の背中を見送りながら、俺はさつき触れた実砂の手を、そつと握つてやった。

「覚えてない……のか？」

「うん。それにしても久しぶりねえ、ヒロってば。なーにー？ 新婚生活？」

記憶が消えてても、発想は同じだった。

大量のクスリを持って慶喜が帰ってきたとき、ちょうど実砂も目を覚ました。覚めたのはいいんだが、なぜ俺がここにいるのかってことを覚えてないようだ。俺が慶喜の部屋に住む、ということ伝えて、そしてホントに覚えてないのかともう一度聞いたら、この返事だ。慶喜のことは覚えていたらしい。ただし、隣人として。

「いやあ、私たちそんなに夫婦に見えます？ ちなみに、どちらが女に見えるんです？」

「そこ！ 話に乗るな！」

クスリを詰めた紙袋を台所においてきたらしい慶喜が、床の上であぐらをかく俺の横に立ち、中腰になって実砂に質問した。実砂はちよこんとベッドに座っている。

「んーとねー……」

「お、お前も答えるなよ！」

ここで“女に見えるのはヒロ”なんて言われたら、どつすりゃいいんだ。

「ヒロより背高いけど、髪長いからケイ君だなあ」

「あら、私ですか。まあ食事作るの私ですし、合ってますね、広直さん」

「俺に同意を求めるなよ……」

そんなにこにこしながら言われたって。

「さてと。実砂さん、今日はこっちで夕食でもいかがですか？ 今日はずき焼きなんですけど」

「お前本気でずき焼きやるのか！？ この真夏に！？」

「食事に季節は関係ありませんよ。さ、どうします？」

俺の大声のつつこみも、静かに受け流された。再び視線は実砂へ。  
「んー……。ケイ君たちが迷惑じゃないなら、食べようかな……」

「もちろん！ 誘ってるんだから迷惑なんかじゃありませんよ。広直さんもいいですよね」

「ん？ ああ、俺も別にいいけど……」

「はい、じゃあ決定！ 実砂さんはテレビでもどうぞ。私と広直さんで用意しますんで」

「え、俺も！？」

「なんだか強制的だった気が。」

「ええ。大丈夫、野菜切ってもらっただけですから」

「さあやるぞ、とまた一人意気込みながら、慶喜はさっさと台所に行ってしまった。」

「ねえヒロ……」

「ん？」

「まだベッドに座っている実砂が、ちょうど立ち上がりかけていた俺に声をかけてきた。」

「……ごめんね、クスリ無理やりあげようとして。謝り足りないかもしれないけど」

「………！」

「まさか……」

「覚えてんのか？」

「うん。今突然思い出したの」

「あいつはまた、記憶を完全に消せなかったわけだ。」

「どうする？ あいつに言うておくか？」

「……うん、いい。あたしから言うてびっくりさせるから」

「いたずら好きな子供みたいに、実砂は笑った。つい俺もつられて口元がほころぶ。いかにも実砂らしい。」

「そっか。じゃ、俺はあいつの手伝いにいくよ。まだ寝ていいぞ」

「うん。ありがとヒロ」

「居候が寝てていいぞと言うのは変だが、まあいいだろう。」

「とりあえず、今はすき焼き作りに専念することにした。後の食事中、実砂が記憶が消えていないことを慶喜にばらし、ガキみたいに」

驚いて落胆したのは、言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6311p/>

---

神様と居候

2011年5月22日11時25分発行